

記憶

飛行

澁澤秀雄

記憶飛行

澁澤秀雄



明治25年10月澁澤栄一の四男として東京で生まれる。東大仏法科卒。TBS、NET放送番組審議会委員。俳号澁亭。

〔著書〕

「さんぽみち」「宴会哲学」「父・澁澤栄一」「らくがき帳」など随筆集多数。

澁澤 秀雄

(しぶさわひでお)

記憶飛行

昭和四十八年二月十日発行

定価 六八〇円

(〒一一〇円)

著者 澁澤 秀雄

発行者 錦 茂 男

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 P H P 研究所

京都市南区西九条北ノ内町11

電話〇七五(六)二四四三

(郵便番号は六〇一です)

無断転載はご遠慮ください

(落丁、乱丁がありましたらお取りかえさせていただきます。)

©HIDEO SHIBUSAWA 1973

0012-039800-7159

まえがき

山を登ってゆく。途中でよく休む。時には石などに腰かけて、来た道をふりかえる。道の彼方には視界が茫漠とひらけている。

かなり高く来たな！ 峻しく寂しい道もあった。だがこの展望は素晴らしい。いつまでも見飽きない。これこそ登山の一得だ！

こんな調子で、私の記憶は過去へ飛ぶ。そこには私の人生が起伏している。ただしその「人生山」は平凡で低い。しかも私の登り方は甘ったるい。だからこの「記憶飛行」は読者を退屈させそうである。

唯一つの頼りは、読者にも少青年期の記憶があることだ。もし私の反芻が少しでも読者の感情移入を誘い、明治という時代の雰囲気や髭髯させてくれたなら、私は最高にうれしい。そしてこれを出版されたPHPに、深くお礼を申しのべてペンを擱く。

昭和四十八年二月

澁澤 秀雄

寒明けの墓塚にさす入日かな

澁亭

記憶飛行・目次

まえがき

柳の木

記憶飛行	8
尋常読本	10
唱歌雑誌	13
遠足と擬戦	17
兎の履歴	24
膝の包帯	27
温室育ち	30
玩具の電話	38
勅語事件	43
後日談	47
新担任	49
汽車通学	53

湯島の岡

徒歩通学

試胆会

寒稽古

喧嘩

横山先生

叱られ坊主

克己学寮

小旅行

物理化学

向陵生活

中堅会

食欲時代

江知勝

謀反論

100 98 96 94

90 87 82 80 77 69 67 64 62

臭気哲学

鉄拳制裁

記念祭

昔の銀座

帝国劇場

古煙突

もののけ先生

ローレライ

新渡戸校長

フランス語

角 帽

文科と法科

背広服

銀行員

洋行はやりもの

170 166

152

140 138 135 133 128 117 114 112 110 107

田園都市

臨床講義

西洋みやげ

新発足

四つの仕事

装幀・上田晃郷

218 205 192 188 175

柳 の 木

記憶飛行

昭和三十七年（一九六二）四月二日の朝日新聞夕刊にのった「素粒子」を節録する。

「六十数年前に出た小学校の同級会が終わり、連中が春の夜の町に散ってゆく様を、渋谷秀雄さんが次の句に託している。

見返ればすでおぼろのうしろ影

生きのびた老年の、目出度き『春愁』の風情でもあらうか」

その同級会で数十年ぶりに対面した友人たちが「ぼく誰だかわかる？ 忘れたかい？」などと言いつたので、会名も「忘れた会」となった。そして七十を越した老人が十六人も、子供みたいな口をきき合う。それを不思議がった料亭の女中さんは、小学校時代の同級会と聞いて、「へえ！ 七つのときからのお友だち、男の方って本当に羨ましいワ」と感嘆した。

これから私はわがジェット機「記憶号」に乗って、明治時代へ飛行する。そこには懐かしい思い出のガラクタが散らばっている。

一体、私は若いときから過去を反芻するのが好きだった。その点、牛みたいである。まったく過去はおいしい。ノスタルジアという調味料がつくからだ。苦さまで甘くしてくれる。

東京高等師範学校（教育大前身）附属小学校は東京市神田区（今の千代田区）一ツ橋にあり、学校の裏手が神保町だった。そして私は明治三十二年（一八九九）に数え年八つで入学した。家は日本橋区（今の中央区）兜町にあり、毎日、幸兵衛という爺やに連れられて徒歩通学した。

学校の近くにはまだ広い空地があった。その原っぱを対角線に突っかってゆくと、夏は足もとからキチキチバッタが飛びだした。東京下町もそれほど田舎びていたのである。

幸兵衛は学校が終わると、同方向へ帰る私の級友二、三を誘いあわせ、隠れん坊をしながら家路につく。まず彼が駆けだして姿を消す。私たちは一心にあとを追う。すると彼は少し先の横町に潜んでいたりする。「見つけた」と私たちが追いつがる。彼はまた素早く逃げる。この反覆のおかげで道草を食う暇などない。幸兵衛もうまいことを考えたものだ。そしてそれほど町が閑散でもあった。まだ日本に自動車などは一台もなかった時代である。鉄道馬車が電車になったのも、やっと明治三十六年の末だった。

そのころ学校の往復に日本銀行の前を通った。ある日私はそこを歩きながら、友だちにもら

った「チンカンモ」なる珍菓を食べた記憶がある。味も菌ぐたえも忘れてしまったが、それは後年のチューインガムだった。訛ってチンカンモになったのだろう。友だちの家がアメリカと取引でもしていたのかもしれない。とにかくあのガムの渡来も、年久しいものだ。

眼をつぶると私の臉に校庭が浮かぶ。広い運動場の中央に柳の大木が立っていた。校舎は平屋の明治式洋風建築。校舎と反対側には低い建仁寺垣がめぐらされ、左端に雨天体操場、右端に花壇や鉄棒などもあった。当時は鉄棒のことを機械体操と呼んだ。

尋常読本

附属小学は尋常科四年と高等科二年だった。担任は鈴木虎市郎先生で、生徒はみなよくなっていた。私が大学を卒業するまでに師事した先生は四十人を越すが、一番懐かしいのはこの鈴木先生である。そして何十年たっても教え子が先生を懐かしがるのは、その先生の情操教育が発を誤らなかつたことであり、生徒の人間形成の第一歩を、正常に踏みださせてくれたことでもある。

ふしぎなことに、私は小学校で習った読本を八冊も保存している。「新編 尋常読本」の巻一から巻四までと文部省著作「小学日本歴史」「高等小学修身書」及び文部省検定済「高等国語読本 巻二」である。

まっ先に習った「尋常読本 巻一」は編者が教育研究所、発行兼印刷者が合資会社普及会で、明治三十二年一月三日の出版だ。縦二十三センチ横十五センチの大きさと、和紙三十一枚が袋とじになっている。奥書の上部に「文部省告示第六十一号調製 明治三十二年二月十四日文部省検定済 尋常小学校読書科生徒用教科書」と右から左へ横に印刷してある。ちなみに文部省は明治四年七月に創設されたが、大臣が所管したのは同十八年十二月からだという。文教の府もまだ若々しかったわけである。

その「巻一」の第一課はページの上に大きな片仮名で「ハ。」とあり、下方に大小二枚の桜の葉の日本画が描いてある。二枚とも少し虫が食っている。右下に「永洗」という小さな署名が見える。

第二課は「ハナ。」花と葉をつけた桜の一枝が描いてある。第三課は「ハタ。」で次のページが日章旗の画になっている。第四課が「タコ。コマ。」第五課「マリ。ハ子。」ネは子の字を使っている。そして第八課の「アリ。ハチ。ホタル。」から第十九課の「ヘチマ。クワキ。レ

ンコン。」までは名詞が三つずつになる。みな画入りだ。それにしてもアリ以下の動植物は、都会の子供にはみな馴染の薄い存在になってしまった。

第三十一課は「フヂ。キジ。シバ。ヒバ。ウヅラ。ネズミ。カップ。コップ。ピストル。ケンペイ。スッポン。スゲガサ。ガマガチ。カザグルマ。」という名詞の羅列で何が出てくるか見当もつかない。いささか精神分裂症患者の作みたいな観もある。

第三十一課の次には濁音、半濁音があげてある。そして第三十二課からは平仮名になる。そして第五十課で一から十までの数を教え、最後の第五十一課は「みづぐるま、みづの まにまにめぐるなり、やまず めぐるも、やまず、めぐるも」の歌と水車の画。そして巻末に平仮名で「いろは」四十七文字と「ん」が出ている。

挿画には陸海軍兵士、加藤清正の虎退治、笛を吹きながら歩く牛若丸、橋上にナギナタを手にして立つ弁慶、童話では猿とかに、狸と兎などが描いてある。

さてこの教科書の「緒言」にはこうある。

「一 本書ハ明治二十四年十一月十七日文部省令第十一号小学校教則大綱ニ拠リ尋常小学校読書科ノ教科書ニ充テンガ為メニ編纂シタルモノナリ

一 本書ハ児童心理発達ノ序ヲ追ヒ力メテ其ノ心情ヲ楽シマシムベキ材料ヲ蒐輯シ之ヲシ

テ興味ヲ多方ニ開誘スルト共ニ品性陶冶ノ資料タラシメンコトヲ図カレリ

一 本書収ムル所ハ広ク修身地理歴史理科及ビ其ノ他日常ノ生活ニ必須ナル事項ニ涉リタルト共ニ聯念律ニヨリテ各課ヲ排列シ又特ニ注意シテ家庭ノ和親ヲ保チ國家ヲ愛シ実業ヲ重ンズル精神ヲ養ハシメンコトヲ力メタリ

一 本書ハ全部通ジテ八巻トナス即チ毎学年二冊宛ヲ課シ四学年ヲ以テ授ケ了ルモノトス
〔下略〕

何と堅苦しい文章だろう。これも時代の顔である。そして聯念律とは連想作用ということらしい。

唱歌雑話

たぶん明治三十三、四年ごろだったと思う。私は小学校で「青葉茂れる桜井の 里のわたり
の夕まぐれ」(落合直文作詞 奥山朝恭作曲)を習った。そしてそのころ町には次の俗謡がはやって
いた。

「何をクヨクヨ川端柳、こがるるナントシヨウ、水の流れを見て暮らす、しののための、ス
トライキ、さりとはツライネってなこと、おっしゃいましたかね」

これは明治三十二年に名古屋の遊廓で東雲^{しのめ}という遊女が、前借金を返さずに自由廃業をして
楼主と法廷で争った結果、宣教師モルフの尽力などもあって訴訟に勝った。そしてそのとき流
行したのがこのストライキ節だというのである。（石田伝吉著『近世文化年代記』）

小学二、三年生の私は当時兜町に住んでいたが、町を流す艶歌師の歌うのを聞きおぼえたら
しい。今でも歌詞や歌曲をハッキリ思いだせる。むろん当時の私はこれを歌って、きっと家の
者に叱られたのだろう。

そのころはやったもう一つの歌は、

「春はうれしや 二人そろうて花見の酒、庭の桜におぼろ月、それを邪魔する雨と風、チ
ヨイと咲かしてまた散らす」

冬は「二人そろうて雪見の酒、障子あれば銀世界」という文句などあった。これは日清戦
争に勝った明治二十八年の京都大博覧会から流行しだした俗曲だという（堀内敬三著『音楽五十
年史』）。酒とアベックの礼讃で、これも小学生の口にすべき歌ではなかった。

いくらラジオやテレビのない時代でも、幼児の耳は吸収力が強い。まして学校で習う唱歌よ